

座談会 実施結果

1 項目ごとの現状と課題等について

第1回から第4回の座談会で得られた参加者からの意見を、取組を検討する上で重要となる4つの項目に分類し、現状及び課題等として整理した。

項目1:社会的養護

<参加者の状況>

- ・ 小さい頃より、父親から、母親とともに虐待を受けており、母親が子どもに危害を加えたことがきっかけで、施設に入所することになった。親と離れて過ごすことで、小さい頃から患っていたアトピーが治った。
- ・ 父親からの虐待があり、大きなトラブルが起こったことがきっかけでソーシャルワーカーの目に留まり、施設に入所することになった。
施設に入って距離ができたことで親との関係が良くなり、連絡を取ることができるようになるなど、普通の家族になったと感ずることができるようになった。
- ・ 家出をしたとしても、未成年だと警察に補導される。その後親に何をされるかと考えると不安になる。
- ・ 家出をしたいと考えたこともあるが、田舎のため、車がない限りどこにも行けなかった。
- ・ 施設の暮らし自体は楽しかったが、できれば家族と過ごしたかった。

<施設入所者の現状>

- ・ 入所者は施設を選べない。また、緊急性があり重大なケースでないと入所できない。
- ・ 外出やお金の使い方、インターネットの利用環境等、制約が多い。また、常に他の人と接する環境のため本心を出せず、ストレスを感じる。
- ・ 家にいたときよりは良いと考え、不満やストレスと折り合いをつけている。
- ・ 自分の親も含め、施設入所に対する偏見がある人もいる。
- ・ 施設入所者ならではの事情を友人に理解してもらえず、人間関係が上手くいかない場合がある。
- ・ 自立するための資金を確保していくことが大変である。

<施設退所後の課題>

- ・ 通常、家庭生活の中で得られる知識や経験、世間の常識が不足しているため、施設退所後に苦労することがある。
- ・ 施設退所後は医療費の負担が大きいと感じる。
- ・ 施設出身者であることは周囲には公言しない。
- ・ 施設出身の友人が、給付金だけでは足りず、あしなが育英会奨学金も借りている。返済の負担が心配である。

＜今後必要となる支援＞

- ・ 施設退所後の自立に向けて、住まいの確保や、経済的な支援があると良い。
- ・ 京都や岡山にある、トワイライトホームのような場所が札幌にはない。
- ・ 気晴らしができる場所が必要。環境が良ければ、祖父母の家などとなるし、お金があればネットカフェになるかもしれない。
- ・ 親しい友達には知られずに行けるコミュニティがあると良い。友達に知られてしまうようだと行きづらい。

項目 2：生活保護・生活の困窮状態

＜参加者の状況＞

- ・ 進路の相談にのってもらえる大人がいたが、早く独り立ちした方がよいと言われても、関連する知識がなかったため、実際にどうしたらよいかは分からなかった。
- ・ 親は何も手を貸してくれず、高校入学のときもお金を出すつもりはなかったため、中学を卒業するときに、自分で市の広報誌を見て社会福祉協議会に相談したことがある。情報や支援の必要性を感じた。
- ・ 収入に見合わず、裕福な世帯が多い地域に住んでいたため、中学校のときは周囲との格差を感じた。高校では住んでいる場所はあまり関係がなく、さまざま場所から生徒が集まってくるので、遊びの誘いなどでもお金がないと言って断るのが楽だった。
- ・ 両親はいるが、小学校低学年から現在まで家事は自分が担い家庭を支えている。
- ・ コンビニのご飯が当たり前で、親の手料理はほとんどなかった。
- ・ 学校と家庭の両方に原因があり、学校に通えない時期があった。
- ・ 思春期には、顔見知りになると馬鹿にされるような気がして、外に出るのが嫌だった。
- ・ 自分の置かれている状況がスタンダードではないことに、他者との関わりの中で気付かされ、今苦しんでいる。

＜生活保護世帯の現状＞

- ・ 生活保護世帯の子どもは、高校を卒業したら、就職して家族（親）を支えなければならない。
- ・ 働いても自由に使えるお金がない。
- ・ 制限や制約がある中での限られた選択しかできず、未来に希望が持てない。
- ・ 大学受験に失敗し、浪人したかったが、経済的な理由から就職した。

<制度の課題>

- ・ 担当となるケースワーカーによって、得られる情報量などが左右される。
- ・ 担任の先生に生活保護のことを聞いても、知らないと言われたことがある。一番身近な大人は学校の先生だが、知識がないとアドバイスをもらえない。
- ・ 持ち家であったため、ひとり親家庭で生計も厳しかったが生活保護を受けていなかった。生活保護世帯であればケースワーカーという存在があり、相談できるが、生活保護を受給していない世帯では、ケースワーカーのような存在の人と接することもできない。

<今後必要となる支援>

- ・ 親でも学校でもない第3の居場所があって、子ども向けのケースワーカーがいると良い。
- ・ 子どもはひとりでは情報を得られないことが多いので、情報を持っていて相談できる人、一緒に考えてくれる人が必要である。

項目3：ひとり親

<参加者の状況>

- ・ 母親の新しいパートナーが出入りするようになった時に、体調を崩すことがあった。
- ・ ひとり親家庭だと進学せずに働いて親を助けなければいけないと思っていた。

<ひとり親世帯の現状>

- ・ 経済的に苦しい世帯が多い。
- ・ 収入が少ない親は、ダブルワーク、トリプルワークをしている。

<制度の課題>

- ・ 働いている親にとっては、相談したくても受付時間に行くことができない。仕事が終わってからでも相談に行ける場所が必要である。
- ・ 本当に大変な思いをしていて、助けが必要な人ほど、支援にたどり着くのが難しい。

<今後必要となる支援>

- ・ 必要な情報が得られやすくなるために、皆が行くような場所で情報が得られるようになると良い。
- ・ 社会資源や施設など、一覧にしたものがあると良い。
- ・ チラシなどを、ひとり親世帯に限定したポスティングや郵送案内ができないか。
- ・ アルバイトをする人はアルバイト情報誌を見るので、そこに相談先等を掲載し、支援につながるようにできると良いのでは。また、自分から電話はできないような人でも、返信ハガキがついていれば、要望や意見、支援の求めを伝えやすくなる。

項目4：奨学金

<参加者の状況>

ー進学についてー

- ・ 生活保護を受給していると、進学に壁を感じる。学費の心配があり、高校進学はあきらめた。
- ・ 私立の高校は経済的な理由で行けなかった。
- ・ 親に負担をかけてしまうと思い、あまり大学進学は考えていなかったが、お金がないことでなりたいた職業に就けないのは後悔すると思い、進学を決めた。
- ・ 偏差値・学歴と所得は比例すると高校の時から考えていたので、アルバイトをしながらでも塾に通った。
- ・ 高校中退が決まった時は、絶望的な思いになったが、その後に入所した施設で復学を勧められ、夜間高校に行くことができた。

ー奨学金の利用についてー

- ・ 高校入学時に奨学金を借りて、大学入学でも更に奨学金を借りるという人もいる。こういう状況を見ると、進学に壁を感じる。
- ・ 学費は奨学金とアルバイト代で賄うが、返済に不安がある。
- ・ 大学の奨学金の返済が月1万5千円程度あるが、仕方がないと思っている。高卒で働くよりも、奨学金を借りてでも大学を卒業した方が、将来の収入が大きいと考えた。

<制度の課題>

- ・ お金がないと塾にも行けず、学力が上がらない。
- ・ 奨学金を借りると利子がかかる。経済的に余裕がない人ほど、大きな額を借りることになり、結果として返済する額も大きくなる。
- ・ 授業料免除の制度や、奨学金の制度があることが、あまり知られていない。子どもには、調べる手段も限られている。
- ・ 奨学金の返済義務は大きな問題だと感じる。貧困世帯の子どもが借りて、大人になって返済するのでは、貧困が連鎖する原因の一つであると考えられる。

<今後必要となる支援>

- ・ 学費の負担軽減。学費の負担が少ない公立高校を増やしてほしい。
- ・ 給付型の奨学金や、無利子の奨学金を増やしてほしい。
- ・ 奨学金の返済期間を延ばす。あるいは返済できないときにサポートが受けられると良い。
- ・ 奨学金を借りている人は、公営住宅が割引になるなどの支援があると良い。
- ・ 授業料免除や奨学金の制度について、もっと広報する必要がある。大学進学ハードルが下がれば、学びたい人がもっと学べるようになる。
- ・ 進学等について、相談できる人が必要である。

2 今後の支援の方向性について

第4回（最終回）の座談会では、これまでの座談会で出た意見等を踏まえた総括として、今後の支援の方向性を検討する上で重視すべき視点が示された。

視点1：「居場所」があり、そこで「人」とつながり、必要な「情報」が得られる体制

困難な状況にある子ども・若者にとっては、家や学校以外の居場所が重要である。

物理的な場所という観点では、家庭から離れた時や住む場所が見つからない時に一時的に生活ができる場所、また、学校以外で通える場所が必要である。

さらに、広い意味で考えると、その場所では出会える人、得られる情報も含めての居場所である。その場所に行けば、相談できる人、一緒に考えてくれる人とつながることができ、将来に向けて必要な情報も得られる。そういったプラットフォームの機能を持った居場所が求められている。

視点2：子どもの貧困は、お金だけでは解決できない

子どもの貧困対策というと、金銭給付をイメージするケースが多い。もちろん金銭面の支援も必要ではあるが、それだけでは貧困の解決にはならない。

お金がないことで、子どもたちは何ができなくなっているのか、何を奪われているかを考える必要がある。

子ども時代に経験できるはずの当たり前前の経験ができない、あるいは人と出会う機会を奪われるといったことが問題であり、このような状況を踏まえた支援の検討が必要である。